

認知症の先駆者として

世界中の医者が誰ひとり認知症の治療をしようとしなかった中で、山本ただひとりが、なんとか認知症を良くする方法はないかと、様々な試行錯誤を重ねていましたので、認知症の患者さんを抱えて苦しんでいらっしゃったご家族からは、大変に喜ばれまして、あの当時、山本病院には日本中から認知症の患者さんが殺到されました。

それだけでなく、一九八二年には、毎日新聞社からぜひにと強く要請されて、「老人ボケは治る」と言う本を出版しました。

本の名前がいささか売名的で気になりましたが、認知症の介護に悩む人々には、ぜひ読んでいただきたいと考えてこれを出しました。

一九八五年には、中央法規出版より「老人ぼけのリハビリと看護」を出版しました。

これらの他にも共著として、以下のものを出しました。

一九八二年 早川一光編「ボケー〇番」現代出版

一九八三年 早川一光編「ボケの周辺」現代出版

一九八六年 三宅貴夫編「ボケ老人と家族への援助」医学書院

一九八七年「最新の漢方治療指針」日本医師会

一九九〇年 大友英一・平井俊策編「高齢者の症例と治療」医療ジャーナル社

一九九〇年 大塚恭男編「難病・難症の漢方治療」医学出版センター

一九九一年 荒木五郎編「高齢者の脳血管障害後遺症と漢方」医薬ジャーナル社

一九九一年 長谷川和夫ら編「漢方薬と脳機能」メディカル・ジャーナル社

一九八四年から二〇〇〇年までの十六年間、名古屋大学医学部で、「痴呆」の講義を担当しましたし、同じく一九八四年から一九九九年まで、特養「さわらび荘」で、愛知県内の職員を対象として、痴呆性老人介護技術の指導を担当しました。

やがて、認知症にも色々な病型があり、軽快するものがあることに多くの医師が気付くようになって、認知症の定義から、進行性で不治という項目が削られるようになり、更に、世界中の製薬会社が、認知症に有効な薬の開発に血眼になって取り組むようになってきました。